



患者を
支える人々

① 検診・手術でがん細胞を探す

② 「プレ・パラートの奥の患者」頭に

細胞検査士 あおき じゅん 青木 潤さん

がん検査の一つ「細胞診」では、子宮の入り口を器具でこすり探ったり、たんや尿などを採取したり、しこりに注射器の針を刺して吸い取ったりして細胞を集める。細胞検査士は、それらをスライドガラスに塗りつけて染色し、顕微鏡で見ながら「がん細胞」や「あやしい細胞（異型細胞）」を探し出す。

1953年生まれ。製薬会社勤務を経て、77年から呉共済病院へ。2003年から臨床病理科（現病理診断科）

現職。細胞検査士会総務委員長。広島県細胞検査士会前会長。

診断科技師長の青木潤さん(56)は細胞検査士になって23年目になる。外国で働ける「国際細胞検査士」の資格も持つ。

がん検診のほか、執刀医らの判断に生かせるよう、手術中に胸やおなかの細胞を短時間で見分けることもある。

異常細胞が見つかったときは、細胞診専門医が最終的な判断を下す。さらに、正常であっても、見落としを防ぐために全体の2割は細胞検査士同士でダブルチェックする。「がん細胞かどうかは、正常な細胞の形態から、どのくらい異なるかで判

断します」

例えば、がん細胞には一般的に、核が大きい▽核の形がいびつ▽細胞が不規則に並んでいる▽普通より細胞が濃く染まっている、などの特徴が見られる。青木さんは1枚のプレパラートを5分程度で見っていく。とはいえ、「唾液や胆汁の細胞は、いまでも難しいですね」。

細胞検査士として一人前になるには5年、自信がつくまでには10年かかるといふ。さらに、日本臨床細胞学会の認定資格として4年ごとに更新しなければならぬ。同科の病理専門医の佐々木なおみさんは「がんのチーム医療には、病理医と細胞のスペシャリストである細胞検査士がいるのが当然です」と言

う。だが、常勤で雇える病院は少ない。

細胞検査士は、普段、患者と接することはない。そこで青木さんは、一昨年から全国の細胞検査士に「がん患者大集会」を手伝おうと呼びかけ、受付や会場の係を買って出た。昨年4月9日の「子宮の日」には、がん検診を勧めるチラシを街頭で配布した。「プレパラートの奥には患者さんがいる」「正常と判定されたとき、どれだけ喜ばれるか」をいつも心がけています」。

（医療ジャーナリスト・福原麻希）
アスパラクラブのホームページに福原さんのコラムを掲載します